



白馬村第4次総合計画

第

1

編

序		章
---	--	---

第1章 計画の趣旨

この計画は、「白馬村第4次総合計画」といい、地方自治法第2条第4項の規定に基づき、将来の施策の大綱を明らかにするとともに、基本的な行政施策の方針を示し、総合的かつ計画的な行政運営を図ることを目的とします。

第2章 計画の構成と期間

(1) 基本構想

基本構想は、長期的な見通しのもとに村の政策目標としての将来像を掲げ、目標達成のための施策の大綱を明らかにするもので、平成18年度を初年度とし、平成27年度を目標年度とします。

(2) 基本計画

前期基本計画は、平成18年度を初年度とし、平成22年度を目標年度とする5カ年計画であり、基本構想に基づいて、現状と課題をとらえ、これを解決するための施策を明らかにします。

(3) 実施計画

基本計画に掲げる事項を実現するため、事業の具体的計画を、財源見通しを明らかにしながら定めるもので、期間を3年間とし、毎年度ローリング方式により実施し、別冊とします。

第3章 白馬村の概要

第1節 村の沿革

信州北西部の寒村だった旧神城村、北城村が昭和31年合併し白馬村が誕生しました。白馬村の今日の発展に大きく寄与したものは、登山とスキーであることに異議を挟むものではありません。白馬岳一帯への登山の歴史は古く、昭和12年頃から、細野（現八方）の集落で登山家に宿を提供したことから、民宿発祥の地と言われています。

明治後年日本に伝えられたスキーは、大正、昭和にかけて徐々に普及し、大きな変革となったことは、白馬村誕生と前後して、裏山開発的にスキー場が造られたことでもあります。さらに、高度成長期となった昭和30年代後半から40年代にかけては、スキーブームが到来したことにより、村内のスキー場は次々と拡張され、大手資本の進出もこれに拍車を掛けるとともに、新たなスキー場も誕生し、白馬村を一大スキーエリアへと変貌させました。

元来豊かな自然環境を有する本村は、ウインターシーズン以外にも観光客が訪れるようになり、産業形態も、それまでの農業に替わって、観光が主要産業となる観光立村となりました。

いわゆる過疎化により減少を続けていた人口も、観光の発展により昭和40年代後半より増加に転じ、ペンションブームの到来とともに都会からの転入者も増え、人口増加による需要や生活環境の変化に対応するため、道路、上下水道などのインフラ整備が進められました。民間においても、押し寄せる観光客に対応するため、次々と民宿、旅館、店舗が建てられ、建設業などの関連産業も潤うこととなりました。

スキーのメッカを自負する本村として、長年の夢であり、念願であったオリンピック・パラリンピック冬季競技大会（長野オリンピック）が1998年に開催されました。本村は、スキー競技（アルペンスピード系、クロスカントリー、ジャンプ、コンバインド）の主要会場地として、競技会場整備はもとより、関連道路整備などの大型事業を次々に行い、運営面においてはボランティアによる村民挙げての活躍などにより、天候不順のなかオリンピックを成功に導きました。

2005年には、スペシャルオリンピックス冬季世界大会も開催され、クロスカントリー競技会場地として世界各国から多くのアスリートを迎えました。「オリンピック」と名のつく冬季三大大会が本村で開催されたことは、非常に大きな意義があります。

バブル崩壊のあった1990年代は、失われた10年と呼ばれ、高度成長時代、右肩上がりの経済は終わりを告げました。長引く不況は、レジャーそのものに対する考え方を換え、観光客の大幅な落ち込みにより、本村の観光産業はスタート以来の大きな変換点を迎えました。

近年は社会情勢の変化に加え、交通網や情報通信手段の発達による行政区域を越えた日常生活圏の拡大、住民要望の多様化や地方分権の推進など自治体を取り巻く環境が大きく様変わりしていま

す。これらの変化と財政危機も相まり、国は強力に「市町村合併」を推し進めることとなり、白馬村としても隣接する小谷村と合併協議を進めて参りました。しかし、自立の道を歩むこととなり、白馬村の特色ある自然景観などの財産を生かした、新たな村づくりが望まれています。

第2節 自然・地理的条件

① 位置・地勢

本村は、長野県の北西部に位置し、周囲65.5km、南北16.8km、東西15.7kmの盆地であり、南は佐野坂峠の分水嶺で大町市と、西は北アルプス白馬連峰で富山県に接し、北は小谷村、東は大町市、長野市に隣接しています。

地域の中央部を南北にフォッサマグナが走っており、この大断層地帯に白馬連峰から流れ出す河川によって扇状地が形成されています。

村の南端佐野坂を水源とする姫川は、村の中央部を縦断して流れ、これに東西山地より流れる支流谷地川、平川、松川、楠川などが合流し、遠く日本海に及んでいます。

西側山岳部は、北アルプス後立山連峰の北の代表格である白馬連峰が急峻な山岳美をみせながら聳え立ち、そこから伸びる八方尾根、遠見尾根を代表とする山麓には、良好な地形を利用して日本を代表するロングコースのスキー場がつくられています。

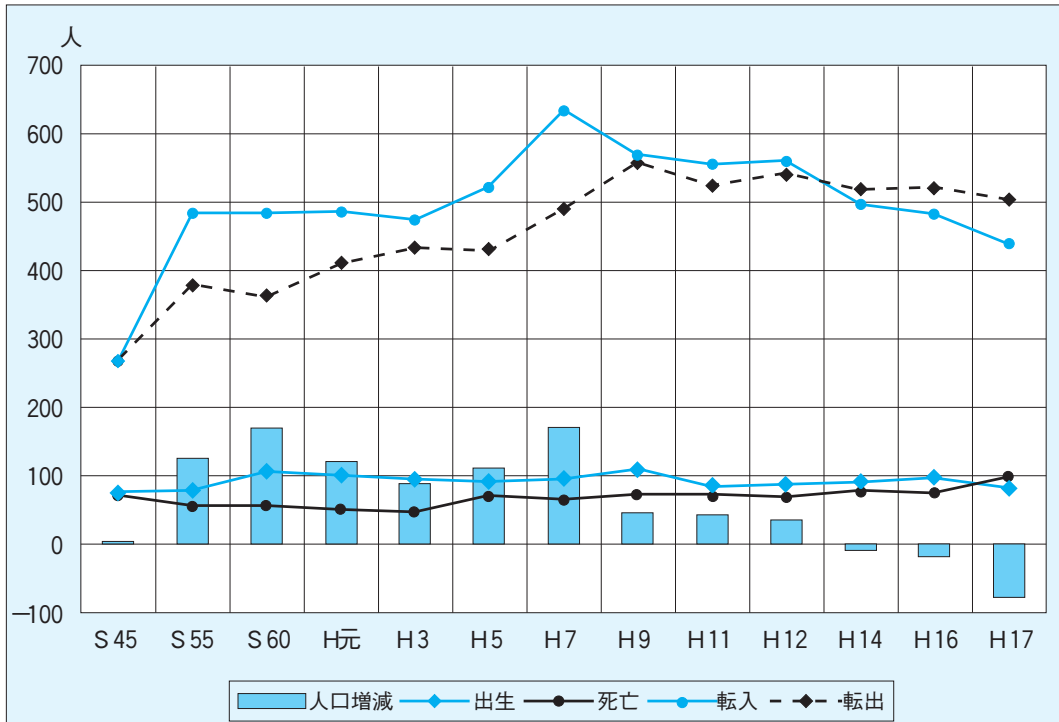
一方東側は第三紀層の比較的なだらかな山地で、豊かな造林地帯となっており、県境の山岳地帯を含め全体の90%が森林・原野で、耕地は村の中心部にわずかに6%程度となっています。

② 気象

本村は、日本の屋根といわれる北アルプスを背にして標高700mの高地に位置するため、降雪が多く、冬の寒さのきびしい時期もありますが、近年温暖化と思われる暖冬傾向になっています。一方、夏は盆地状の地形から、日中の気温は高くなるものの、朝夕は涼しく過ごしやすく、平均気温は10℃前後、年間の降水量は、1,900～2,000mmで、年間を通じて晴天は少なめで、冬が長く、夏が短いという裏日本型降雪地帯の典型といえます。

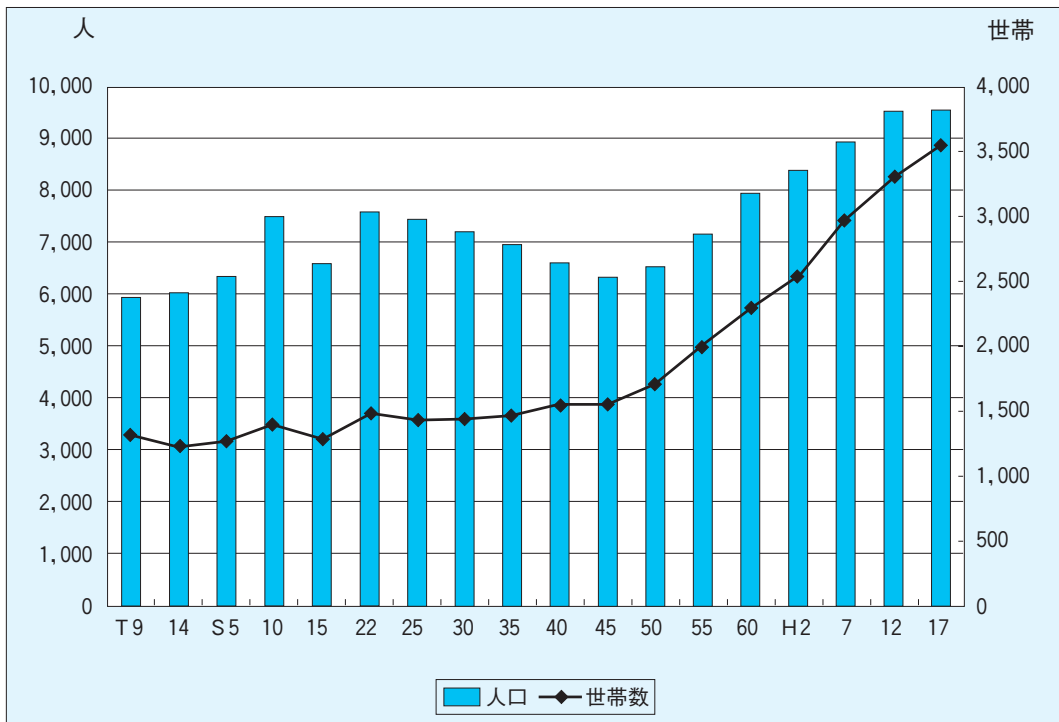
しかし、全体的には冷涼な気象と、豊かな自然が相まって、日本のスイスといった風土をつくりだしています。

人口動態と人口増減の推移



資料 住民課

人口と世帯数の推移



資料 国勢調査

第3節 社会的条件

① 人口・世帯

国勢調査の始まった大正9年の人口は、5,895人です。その後、増加の一途をたどり、昭和22年には、7,553人となりました。しかし、若年層の都市流出などにもない過疎化傾向が続き、昭和45年に最も少ない6,300人程度の人口となりました。観光産業が発展し、都市部からの転入などにより人口が増加に転じ、また若者のUターン、Iターンにより村に止まるなどの要因から、その後平成12年度まで増加傾向が続いていました。

第4次総合計画前期計画前年の平成17年国勢調査では、人口9,507人、世帯数3,540世帯となっています。しかし、自然増減では平成17年より減少傾向に転じるとともに、社会増減においても観光産業の低迷により、減少傾向となっています。そのため、今後の少子・高齢化に向け、各種の環境づくりが求められています。

② 産業構造

就業者人口は、村の人口の増加とともに全体的に若干増加してきましたが、人口同様にその変動

産業別就業人口の推移

区 分	S45年	50年	55年	60年	H2年	7年	12年
総 数	4,002	3,874	4,059	4,619	4,783	5,267	5,400
第 1 次 産 業	2,166	1,595	849	786	586	454	416
農 業	2,147	1,572	827	770	575	452	408
林 業	19	21	22	15	10	1	8
漁 業	—	2	—	1	1	1	—
第 2 次 産 業	599	658	837	860	896	1,001	1,041
鉱 業	7	31	9	62	48	2	54
建 設 業	447	467	611	579	663	756	750
製 造 業	145	160	217	219	185	243	237
第 3 次 産 業	1,235	1,618	2,373	2,966	3,273	3,805	3,943
卸 小 売 業	317	348	581	724	696	868	890
金融・保険・不動産業	28	49	54	74	83	123	95
運 輸 ・ 通 信 業	237	271	255	298	162	395	386
電 気 ・ ガ ス ・ 水 道 業	26	18	27	30	28	21	34
サ ー ビ ス 業	547	841	1,364	1,738	2,193	2,266	2,410
公 務	78	88	92	102	111	132	125
分 類 不 能	2	3	—	7	28	7	3
就 業 率 (%)	63.6	59.6	56.9	58.3	57.2	59.0	56.9

資料 国勢調査

割合は少なくなってきました。

第1次産業は、調査の度に減少し、第2次産業は微増、第3次産業も同様に微増の傾向です。直近の平成7年と平成12年を比べてみても変動割合は少なく、今後ともこの傾向が続くと思われる産業別人口は、人口の社会動態の影響を受けやすいと考えられます。観光産業の低迷などに起因する人口の変化により、第3次産業における就業者人口の数値が、大きく左右されると思われます。

